

国立科学博物館 企画展 「震災からのあゆみ」

あいおいニッセイ同和とNHK財団が
8K+AI合成音声で『災害の記憶』を展示



1877年創立の「国立科学博物館」が保管している標本・資料は500万点以上で、約2万5,000点を常設展示する総合科学博物館である。また、クラウドファンディングで9億円が集まる国民の信頼に支えられている。1931年にネオルネサンス様式建築で建てられた日本館で、関東大震災100年企画展「震災からのあゆみ ―未来へつなげる科学技術―」（2023年9月1日～11月26日）が開催され、中央ホールでは「8Kで観よう!!『災害の記憶デジタルミュージアム』」が公開された。（レポート・写真：吉井 勇・本誌編集部、写真提供：NHK財団）

江戸時代の災害を19点の資料で

関東に甚大な被害をもたらした関東大震災から100年を経た今、国立科学博物館（科博）が「震災からのあゆみ」という企画展を開催した。「関東大震災とその復興、そしてこの100年間の地震防災研究などを紹介しながら、人と自然、科学技術の関係や、過去から学び未来へつなげていくことの重要性を考える展覧会」と、科博らしいテーマである。展示企画を担当した科博 理工学研究部 研究主幹の室谷智子氏は、東京大学地震研究所などで地震学を研究してきた専門家で、「この100年間の観測技術の発展による緊急地震速報や津波情報の発表、建築物に対する防災・減災の技術、ライフラインへの対策など、地震・防災の研究を俯瞰できるように展示を工夫しました」と説明する。

展示会場である日本館の中央ホールには、10月11日



から8Kと高音質AI
合成音声で体感
できる「8Kで観よ
う!!『災害の記憶

写真右からあいおいニッセイ同和損害保険委託 横井通時氏、国立科学博物館 理工学研究部 研究主幹・室谷智子氏、NHK財団 社会貢献事業本部 技術主幹・石井啓二氏

デジタルミュージアム』」（「8K災害の記憶」）を展示した。この「8K災害の記憶」は、あいおいニッセイ同和損害保険（あいおいニッセイ同和）とNHK財団が開発したバーチャルリアリティ（VR）空間で過去の災害資料に触れる「災害の記憶デジタルミュージアム」をベースに、8K対応75インチのディスプレイ画面に災害資料を表示する。例えば、1855年に描かれた錦絵の一つ「安政二乙卯年大震災大火の図」（左の写真）では、細部の線画はもとより、画面上部に書かれたくずし字が墨の濃淡も含めて読み取れる精細度の迫力に驚く。

「8K技術によって資料の地名や震災に巻き込まれる人々の表情など、遠目ではなかなか気づきにくい細かな描写まで観察することができます」とNHK財団 社会貢献事業本部 技術主幹の石井啓二氏は話す。この「8K災害の記憶」は江戸時代の災害の記録として、①江戸の大地震、②地震と鯨、③大火／風災／疫病の3つで構成され、19点の災害資料をゲーム型コントローラーで操作しながら体感していく。

初代社長の廣瀬氏自身が収集したコレクション

これらの災害資料はあいおいニッセイ同和が所蔵する1,400点にも及ぶ資料群。「18世紀から20世紀初頭に日本全国で発生した各種の災害をほぼ網羅しています」とあいおいニッセイ同和 委託の横井通時氏。「災害資料は大正後期から昭和10年ごろまでの約15年をかけて同和火災海上保険の初代社長、廣瀬鉦太郎氏が自ら収集したコレクションです。関東大震災の当時、地震保険がなく、地震は火災保険の補償対象外でしたが、被災者対応の先頭に立って事態の収拾に奮闘しています。その経験から災害に関する多くの資料を収集するようになったようです。会社を辞する時、これらの資料を会社に寄贈したそうです」（横井氏）。

室谷氏は「資料としてきちんと裏打ちされて色落ちも少なく、良い状態」と高く評価する。古い時代の地震、津波、洪水などの自然災害、大火や疫病など当時の人々の生命や生活を脅かした厄災などの実際の様子が生々しく描